日本敗戦後の李守信：反共・入獄・特赦・その後

娜仁格日勒（ナランゲレル）

はじめに

李守信（1892.7.11-1970.5.?）は、本名ナソンバヤル、別名李義、字子忠で、李守信という名は熱河遊撃馬隊に入ったあと使うようになった。内モンゴルのジョソト盟トゥメト右旗（現在遼寧省朝陽）出身のモンゴル人で、軍人としての階級は大将である。東北軍騎兵第17旅団の連隊長、旅団長などを歴任した。1933年より、日本に協力するようになってから熱河遊撃師司令官兼経林留守司令官[1]、察東特別自治区行政長官、察東警備軍司令官を経て、1936年以降、ドムチョクドンロプ（徳王）政権のなかで軍事と政治の要職についた（写真1、2）。

日本の敗退後、李守信は蒋介石によって東北民衆自衛軍総司令官に任命され、主として東部内モンゴルと中国東北地域で活動した。1949年、徳王とともにアラシャンでモンゴル自治政府を創設するが、失敗した。その後、徳王を追ってモンゴル人民共和国に赴く。ウランバートルで逮捕され、中国に強制送還された。15年近くの長い獄中生活を送ったあと、1964年12月28日に、73歳の高齢で特赦され[2]（写真3）、1970年5月にフフホトで逝去した。

写真１　モンゴル連盟自治政府要員（1938年）。
前列中央が徳王、その右側は李守信である。

自伝のなかで、李守信は幼いころのことから、1945年8月に張家口を離れ、北平に逃れるまでの半生を詳細に回顧している。自伝の作成は特赦されたあと始まったが、文化大革命の勃発によって中止された[3]。李守信の経歴の複雑性が原因だろうか、世を去って半世紀も経った今日まで彼に関する専門的な書き物は見られず、徳王政権のナンバーツーであっ

---

[1] 内蒙古自治区政協文史資料研究委員会編『李守信自述』（内蒙古文史資料第20輯）、1985年、第11-12頁、第24頁。経林留守司令官はすなわち経棚（Biragu balgasu）、林西の留守司令官（『李守信自述』第128頁を参照）。

[2] 特赦令では李守信が収監されてから「十年が経った」と記している。実際、1950年に送還されてからすでに15年近くの歳月が経過していた。

[3] 前掲書第352頁。

た重要な存在がすっかり忘れられたようである。内モンゴル近現代史研究のなかで、ひとつの遺憾なことだと言わざるを得ない。小論では、文献資料とフィールド調査資料を用いて、李守信の1945年以降の活動および晩年の生活のアウトラインなどの復元を試みる。

1. 日本敗戦から1947年2月まで：東北地域と内モンゴル東部における活動

日本の敗戦が伝えられたあと、モンゴル自治邦政府所在地の張家口にいた徳王と李守信はともに張家口から北平に逃れた。のちに、李守信は東北で軍隊を集結し、一時、規模が急速に大きくなった。

1. 1. 張家口から北平まで：なぜ国民党側にかたむいたのか

1945年8月15日、李守信は日本人将校から日本の敗戦を知らされたが、かれはそのとき、張家口にいた。モンゴル軍（写真4）の大部分は宝貴廷が率いて厚和（現フフホト市）の付近に、他は宣化、察北と綏東にそれぞれ駐屯していた。早速、宝貴廷に部隊を厚和に集結させるよう電話で指示した。午後、八路軍が陳毅の降服勧告書を持ってきたが、李守信は駐モンゴル日本軍すなわち「駐蒙軍」に提示するように回答したあと、自らも軍に行き、対応を求めた。「駐蒙軍」は「われわれはアメリカと蒋介石には投降するが、ロシア人と八路軍には絶対に降服しない。（中略）われわれが撤退したあと、張家口は国民党に明け渡せ。断じてロシア人と八路軍に渡してはいけない。かれらは信義を守らない。」[4]と返事した。しかし、李守信はこの時点で国民党と共産党のいずれにつくか、決断を下したわけではない。

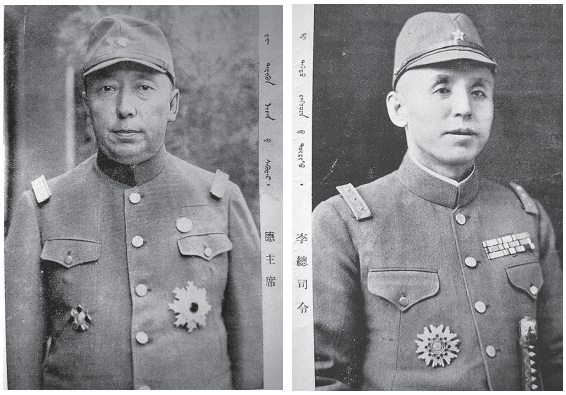


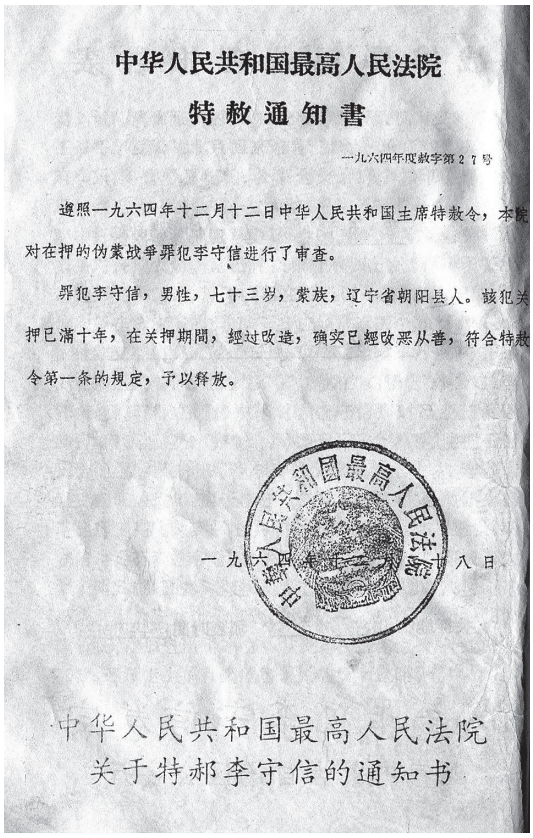
写真２　徳王と李守信（モンゴル総軍司令部発行 *Temür kerem*（鉄壁）創刊号 1941 年 11 月 20 日より）。写真のモンゴル語は“De terigün noyan-u següder, Li degedü jangjün-ü dürsü”である。

15日の晩、李守信がふたたび宝貴廷に部隊を率いて張家口に来るように電話で命じていた途中、電話が中断し、それ以後、連絡が取れなくなった。19日の張家口脱出まで待ったものの、宝貴廷は現れなかった。後になってわかったことだが、17日、ダランハラ・ウーラ（大青山）でゲリラ戦をしていた八路軍が厚和を攻撃したため、宝貴廷と包海明が傅作義に代わってこれに反撃し、八路軍を撃退したあと、傅作義の指揮下に入った[5]。事実、後

[4] 前掲書第338-340頁。
[5] 前掲書第341頁。

に、宝貴廷の部隊は傅作義の圧迫と抑制によって、瓦解されてしまい、李守信の厚和帰還とモンゴル軍を再度統率したいという願望も絶たれた[6]。

同15日の晩、徳王は李守信に「蒋介石からの電報に撤退すぜ、現状維持」との命令があったと伝えた。徳王と李守信が今後の対策について相談した結果、ウルジーオチル（烏勒吉敖喜爾）を派遣して八路軍と連絡を取ることを決めた。ところが、17日、李守信が徳王公邸にいたとき、ソ連の軍用機2機が張家口の上空より爆弾を投下し大量のビラを撒いた。ビラに徳王を「売国奴」、「蒙奸」と激しく責めていた。徳王は「これでは、この道はもう通れない」[7]と断念した。



中华人民共和国最高人民法院

特赦通知書

一九六四年度赦字第27号

遵照一九六四年十二月十二日中华人民共和国主席特赦令，本院对在押的伪蒙战争罪犯李守信进行了审查。

罪犯李守信，男性，七十三岁，蒙族，辽宁省朝阳县人。該犯关押已滿十年，在关押期間，經过改造，确实已經改恶从善，符合特赦令第一条的規定，予以释放。

中华人民共和国最高人民法院

一九六四年十二月十八日

中华人民共和国最高人民法院
关于特赦李守信的通知书

写真３　李守信特赦令

さらに、徳王の派遣した連絡員がソ連軍に拘束され、ソ連軍がシリーンゴル盟、チャハル盟などの占領地で、モンゴル人の家財道具を略奪したり、放火したり、女性を暴行したりしたこと[8]は徳王と李守信らが国民党がわに傾く要因のひとつとなった。言い換えれば、客観的に見ると、日本の敗退後、徳王と李守信が行き先をきめかねていたときの、ソ連軍の種々の行動が、徳王らが最後の決定を下す重要な要因となった。

18日、ソ連・モンゴル連合軍は張北から出発して張家口を攻撃した。19日、徳王と李守信は日本軍の保護下で張家口を離れる。20日、宣化に着くと、蒋介石からの委任状が届けられ、モンゴル軍を第十路軍に改編し、李守信を総司令官に任命した。李守信は即座に察東と晋北の各県で部隊召集の準備にとりかかった。のちに彼自身は「政治情勢に対する正確な予測と判断ができなかったことと、北平の財産が気がかりであったため、自ら部隊を

---

[6] 内蒙古自治区政協文史資料委員会編『偽蒙古軍史料』（内蒙古文史資料第38輯）、1990年、第96-98頁。

[7] 『李守信自述』、第340-342頁。また、徳穆楚克棟魯普「赴蒙古人民共和国的経過」、『阿拉善盟文史第5輯　徳王在阿拉善』、第47頁；徳王自述、第190頁；『偽蒙古軍史料』第74頁などにも同じ記述がある。

[8] 札奇斯欽『我所知道的徳王和当時的内蒙古』、中国文史出版社、2005年、第432-436頁。

率いるのを怠った。これが爾後のモンゴル軍の四分五裂を招いた」と後悔している。

しかし、たとえ李守信がみずから部隊を指揮したとしても、モンゴル軍は軍閥傅作義らの大漢族主義によって分割・瓦解される運命を必ずしも逃れえなかっただろう。かつて、2万の兵士を有したモンゴル軍総司令李守信は独りぼっちになり、一兵卒もない苦しい状態に陥った。同20日、宣化にとどまっていたときに、ふたたび陳毅の降服勧告書が届けられたにもかかわらず、李守信は「検討してから回答する」と事実上拒否した[9]。21日、一行は北平に到着した。

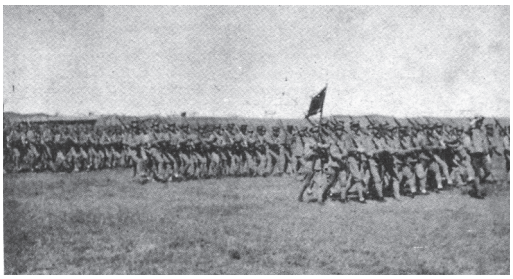


写真４　モンゴル軍の隊列
（森久男『日本陸軍と内蒙工作』より）

１．２．北平から東北へ：余儀なく国民党のために軍隊を創設する

李守信が中国東北と内モンゴル東部で軍隊を再建したのは、北平に逃れた半年後のことである。この期間においても、彼は厚和に戻り、昔の部隊を再度統率することを夢見ていた。

１．２．１．モンゴル軍再度統率の希望と傅作義の断固たる反対

北平に着いてからまもなく、李守信、呉鶴齢、烏古廷、チョクバートル（Chogbagatur, 陳紹武）らは徳王とともに西安を経由して、重慶に赴き、9月3日、蒋介石と会見した。蒋介石の指示によって、李守信は10月上旬の末頃、北平に戻った[10]。当時、マーニバダラは蒋介石に会うため重慶へ向かう途中、北平に滞在していたので、李守信とも面会した。マーニバダラの重慶行が北平で頓挫したことはよく知られている。

一方、徳王、李守信らと国民党との接触を阻止するため、10月23日、中国共産党中央は迅速かつ有効な対応措置を講じる指示を出した[11]。さらに、1945年11月、中共晋察冀割拠区（晋察冀辺区）政府が徳王、李守信らを指名手配した。その原文は「偽蒙疆政府主席徳王、偽蒙古軍総司令李守信、偽蒙疆政府政務院長呉鶴齢を指名手配する」となっていた[12]。したがって、この時点で、中国共産党はすでに徳王と李守信を敵対勢力とみていたことがわかる。

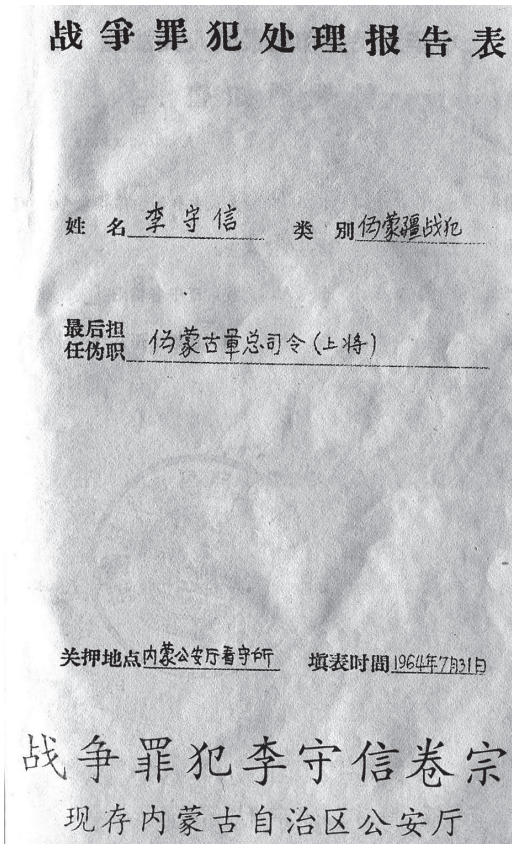
---

[9] 『李守信自述』、第242頁、第270頁、第344頁、第347頁。

[10] 内蒙古自治区政協文史資料研究委員会編『徳穆楚克棟魯普自述』（内蒙古文史資料第13輯、以下『徳王自述』と略す）、1984年、第141頁。

[11] 中共中央統戦部編「中共中央関於内蒙古工作方針給晋察冀中央局的指示1945年10月23日」『民族問題文献彙編』、中共中央党校出版社、1991年、第964頁。

[12] 内蒙古公安庁公安史研究室『解放戦争時期内蒙古東部地区公安工作大事記述』（繁体第一稿、征求意見稿）、1986年、第11頁。


战争罪犯处理报告表

姓名 李守信　　类别 伪蒙疆战犯

最后担任伪职 伪蒙古軍总司令（上将）

关押地点 内蒙公安厅看守所　　填表时間 1964年7月31日

战争罪犯李守信卷宗

現存内蒙古自治区公安厅

写真５　戦争罪犯処理報告表（戦争罪犯李守信巻宗）

写真６　大廟村医務室

李守信は重慶から北平に戻ったあと、綏遠に帰ってモンゴル軍を再度統率することを強く望んだが、第十二戦区司令官傅作義と旧部下宝貴廷のいずれからも連絡が来なかった現状を考慮して、動けなかった。傅作義が彼の厚和帰還を許可しなかったことが後になって分かった。

1945年12月の上旬、北平で傅作義は李守信と会い、李守信の厚和帰還は不当だとの考えをただちに伝えた[13]。つまり、傅作義は李守信の綏遠帰還を直接拒絶した。事実、その後、傅作義は宝貴廷が率いるモンゴル軍の大部分を分割して自らの支配下に編入した。李守信はまた国民党第十一戦区司令官孫連仲に旧部下宋万里、劉継広の部隊に対する給養物資の支援を求めたが、これも断られた。宋、劉の部隊も後に、孫連仲に併呑された[14]。

これと同時に、馬漢三は李守信に東北で新軍隊を創設するよう再三迫った。11月、北平で戴笠が李守信と面会し、軍隊創設について錦州の東北行営と交渉するよう指示した。これを受け、李守信はやむを得ず、錦州を経由して北票に来た。北票で人馬を集め、部隊を作る予定だったものの、熱河省主席劉多荃の阻止によって実現できず、12月初頭、北平に戻った。

1. 2. 2. 国民党の再三の催促脅嚇と李守信の軍隊創設

ちょうどこのときにあたって、蔣介石と戴笠がまた北平に来た。蔣、戴は李守信と会見し、東北での軍隊創設を再度求め、給養等をいっさい東北行営が支給することを保証した[15]。

[13] 『偽蒙古軍史料』、第94-96頁。
[14] 前掲注12文献、第68-69頁。

しかし、李守信は依然として動かなかった。

1946年3月～4月の間、戴笠は北平に来て、またもや李守信に軍隊の創設をせまった。こうして李守信は錦州へ向い、錦州で熊式輝の指示にしたがい、北票に「熱遼辺区人民自衛軍」司令部を立ち上げ、熱河と遼寧の境界地帯で兵士を集めた。既述のように、李守信の厚和帰還とモンゴル軍統率の願望は強烈なものであったが、傅作義の阻止によって実現できなくなり、やむをえず東北で新軍隊を組織することとなった。

写真７　左側は大廟村医務室で、
右側は村政府である。

北票ではすぐに3千の人馬が集まった。これには旧部下の劉継広・李樹声の部隊、イヘンゲ（依恒額、依紹先）が阜新で召集した1,700名、開魯県長張念祖の部隊500余名等がふくまれていた。張念祖は1946年1月16日、共産党軍に敗れ、開魯を明け渡し、北票に逃げ込んで駐屯していた[16]。まもなく、李守信に部隊の改編を求め、接収された[17]。

写真８　徳王と李守信
（写真提供：李貴民）

ところが、国民党熱河省主席劉多荃の妨害をたびたび受け、活動不能になった、成立ほどない「熱遼辺区人民自衛軍」司令部は北票を離れ、東のモンゴルジン（阜新）に移った。1946年6月、蒋介石は北平で李守信と会見し、東北行営の支援のもとに部隊をさらに拡大するよう指示した[18]。

李守信が阜新にもどったあとも、多くの部隊が接収・編入を求めてきた。元フレー（庫倫）旗保安隊は東モンゴル人民自治軍騎兵[19]第2師団第14連隊に改編され、フレー旗に駐屯していた。7月中旬、フレー旗ジャサク王ロブサンリンチン（Lubsangrinchin）[20]の腹心ウリジ

---

[15] 前掲注13文献、第98頁。

[16] 前掲注12文献、第19頁。

[17] 1946年2月、張念祖が部隊1千余名を率いてナイマン（奈曼）を攻撃し、解放軍を破り、綏東県を復活させ、ナイマンに盤踞した。まもなく、アスガン将軍がモンゴル騎兵を指揮してナイマン保安隊とともにダイチンタラーを奪還し、張念祖は敗退した。のち、張念祖は李守信に編入を求め、部隊が改編された（奈曼旗政協文史資料工作委員会『奈曼旗文史資料』第1輯、出版年代不明、第25頁、第41-43頁）。

[18] 前掲注13文献、第122-123頁。

[19] 内モンゴル騎兵の歩みについては娜仁格日勒（ナランゲレル）「中共による内モンゴル騎兵部隊の解散までの軌跡」（『日本とモンゴル』第49巻第1号、2014年9月）、楊海英『チベットに舞う日本刀』（文藝春秋、2014年）を参照。

バト（Öljeyibatu）は、前者の指示で600余名の騎兵を率いて共産党解放軍に反旗をひるがえし、熱河辺区騎兵第5連隊として李守信の軍隊に編入された。ウリジバトは連隊長に任命される。この事件で、ロブサンリンチンが東モンゴル人民自治軍騎兵第2師団長ナチンションホルの命令で秘密逮捕、処刑されたことは中国公安庁の公文書に書き残されている。8月、李守信軍は開魯を占領した[21]。

写真９　李守信墓碑

元ナイマン旗保安隊が東モンゴル人民自治軍騎兵第2師団第15連隊に改編され、これも依然としてナイマン旗に駐屯していた。9月22日、第15連隊の顧問で、元保安隊副司令官ロブダン（Lobdan）が連隊を率いて反旗を挙げ、1,300余名の騎兵を連れて李守信軍に編入を求めた。今回の謀反はナイマン旗王ソドノムドルジ（Sodnamdorji）が画策し指導したゆえ、国民党東北行営はソドノムドルジを「人民自衛軍」副司令官に任命した[22]。

こうして、李守信軍には主としてイヘンゲ部隊、張念祖部隊、フレー旗保安隊、ナイマン旗保安隊の4つの部隊が所属し、総数は少なくとも5,000名に達した。

1. 2. 3. チンジョリクトに対する工作

李守信は軍隊の規模をさらに拡大するため、1946年7月、北票から東モンゴル人民自治軍騎兵第4師団長チンジョリクト（和子章）に手紙を送り、オンニュート旗ボルホト（烏丹）の附近でチンジョリクトの部隊に武器弾薬を空輸・投下する約束をした。ところが、手紙

---

[20] フレー旗ジャサク王ロブサンリンチンはもともと僧であり、実弟が旗のジャサクを務めていた。八路軍がフレー旗を攻撃し、弟を殺害したため、ロブサンリンチンは還俗して、弟のかわりに軍隊を率いて、八路軍と戦い、李守信の指揮下に入った（前掲注12文献、第36-37頁；『偽蒙古軍史料』、第123-124頁）。

[21] 前掲注12文献、第37頁；赤峰市政協文史資料委員会『和子章与蒙騎四師』、1989年、第46頁。なお、前掲注12の文献は李守信軍が開魯を占領した時期を1946年11月としている（第37頁）。

[22] 前掲注12文献、第37頁。なお、今回の反乱に関しては、当該文献の第37-38頁に次のように記されている。「土地改革、鎮圧反革命およびほかの各種運動のなかで、人民政府は、反乱の指導者、主要なメンバー、反乱後に罪悪を犯した者、人民の怒りを買った者らについて徹底的に調べた。フレー旗反乱事件の調査結果の統計では、28名が処刑され、10名が戦死し、23名が有罪判決と管制と決められた。ナイマン王ソドノムドルジは解放後に逮捕され、1952年に北京西城監獄で病死した」。

は途中、共産党の公安機関に没収され、共産党側はチンジョリクトを装って手紙のやりとりを繰り返し、面会に来た李守信側の連絡人を逮捕した[23]。

李守信のチンジョリクトを謀反させる工作はこのあとも何度も行なわれた。同7月、李守信はチンジョリクトに「国民党ジョーウダ盟自衛軍軍長」の委任状と印章を届ける特務を派遣したが、これも途中、共産党に差し押さえられ、チンジョリクトはこの件を後になっても知らなかった。「東北行営蒙旗聯防指揮部」は国民党特務呉化民を林東に潜伏させ、チンジョリクトに謀反をすすめることを計画した。しかし呉化民も途中で、共産党に秘密裡に逮捕された。11月、徳王と李守信はチンジョリクトに謀反するよう伝言を伝えた。国民党第93軍軍長卢浚泉もチンジョリクトに自筆の手紙を送り、徳王と李守信のようにモンゴル民族のために戦い、国民党側に寝返るように離反をすすめた。しかし、手紙を届けた特務もまたもや共産党公安処に逮捕された[24]。

1. 2. 4. モンゴル騎兵の李守信追随

チンジョリクトに対する工作は成功できなかったものの、モンゴル騎兵部隊には共産党から離反して李守信にしたがう者が少なからず現れた。

写真 10　李守信墓碑と李貴民

1946年4, 5月から11, 12月のあいだに、共産党に掌握されていたモンゴル人部隊の離反事件が数多く起こった。前に述べた騎兵第2師団第14, 15連隊のほかに、大きな反乱にはつぎの事件がある。アルホルチン旗公安課長ソングンチュアン（孫根全、孫明海）が120余人の兵士とともに反乱をおこした。チンジョリクトが指揮するモンゴル騎兵第4師団第1支隊隊長兼第35連隊長エルデンゲ（Eldengge）とアルホルチン旗ディブリ・スメ（Dibüli süme）の活仏タルバ（Tarba）[25]兄弟が連隊の兵士500余人を率いて蜂起し、中隊長アルブンガ（Arbüngga）とドノルブ（Donorbu）も反旗をひるがえした[26]。第34連隊副連隊長兼第3中隊長ハンサ

[23] 前掲注12文献、第56頁；『和子章与蒙騎四師』、第45頁。

[24] 前掲注12文献、第43頁、第55頁。

[25] 第35連隊はアルホルチン旗保安隊を改編したものである。エルデンゲとタルバが第35連隊の兵士500余人（連隊全体は600余人）を率いて反乱を起こし、李守信に受け入れを求め、許可され、タルバは李守信に熱北保安副総司令官に任命された。タルバはのちに、瀋陽で共産党軍と戦い、またその後、徳王の甥アルタンオチルらと合流し、徳王のモンゴル自治政府に参加した（内蒙古自治区公安庁辺防局編『内蒙古公安辺防史料1950-1985』、1989年、第136頁）。

写真 11　李守信墓碑と盛り土の墓

ンジェー（Qan Sangjayi）[27]、副中隊長ドィンホルジャブ（Duyingqurjab）、第3中隊のセメジル（Semjil）、第2中隊長オルト（Urtu）らもそれぞれ兵士を率いて離反した。第36連隊の一部の士官、第37連隊[28]の連隊長フーシンガ（Füshingga）と参謀長センゲガルブ（Senggegarbu）がそれぞれ連隊の多くの兵士を動員して反乱をおこすなど[29]、大きな武装反乱が十数件も発生した。モンゴル騎兵第4師団で起こったこれらの反乱の規模は、エルデンゲの反乱部隊だけでも500余人に達し、師団全体の反乱者数は計1,000人以上にのぼり、すべて李守信にうけいれられ改編された。

これ以外に、小規模の反乱も多く起こり、すべて李守信をたよって行った。これらの部隊はホルチン左翼中旗のスヘバートル、フレー旗のロブサンリンチン、ナイマン旗のソドノムドルジらの部隊と相互に呼応して、総人数が3,000を超える強い勢いを見せ、共産党軍と多くの戦闘を交えた。たとえば、10月、エルデンゲ、タルバらがダーリジャブ（Darijab）の開魯蒙旗自衛軍と連合して、チャバガ鎮（天山）を奪還するため、共産党解放軍と戦った。いわゆる「天山保衛戦」である[30]。

李守信をたよってきた部隊の中には、彼の旧部下も少なくなかった。一例を挙げると、崔興武の部下だった当時の祝韓三、張奎武らは、この時期、李守信によって自衛軍の旅団長、連隊長に任命された。祝、張は軍隊を拡大して、1947年4月に林西とビラゴバラガス（経棚）を襲撃し、林西駐在の中共冀察熱遼首脳機関を殲滅する計画を立てた。しかし計画は共産党の特務機関に察知され、1947年1月31日、祝韓三らが逮捕された。これが「黒龍案」である[31]。

---

[26] 阿魯科爾沁旗志編纂委員会編『阿魯科爾沁旗志』、内モンゴル人民出版社、1994年、第849、866頁；赤峰軍事志編纂小組編『赤峰軍事志』、内モンゴル人民出版社、1992年、第407-409頁。

[27] 第34連隊はバーリン右旗保安隊を改編して成立した。ハンサンジェー（韓桑傑）は李守信に警衛隊隊長に任命された（翁牛特旗軍事志編纂委員会編『翁牛特旗軍事志　公元1295年―公元2005年』、2008年、第243頁、第245-252頁）。

[28] 第37連隊は元ジャロード旗自衛隊を改編して成立した。フーシンガとセンゲガルブについては都瓦薩「内蒙古自衛軍騎兵第四師三十七団」『扎魯特史話』、内モンゴル人民出版社、1989年、第186-190頁；『赤峰軍事志』第391頁などを参照。

[29] 克什克騰旗軍事志編纂委員会編『克什克騰旗軍事志』、2008年、第28-29頁。

[30] 前掲注12文献、第45頁；『赤峰市軍事志』第391頁。

[31] 前掲注12文献、第65頁。

1. 2. 5. 人民自衛軍総司令部の開魯遷移

李守信の部隊が短期間のあいだに迅速に拡大したため、国民党は李守信を熱河省保安副司令官に任命した。総司令官は依然として劉多荃であった。1946年8月、国民党東北行営蒙旗聯防指揮部が錦州で成立し、李守信は熱蒙各旗聯防司令に任命されたが、のちに、李守信の推薦で烏古廷が就任した[32]。

蒙旗聯防の成立後、熱遼辺区の各県を管轄する国民党第71軍軍長陳明仁も李守信に協力すると表明した。これを受け、李守信は陳明仁の指示にしたがい、鄭家屯で「人民自衛軍」司令部を立ち上げ、人馬を集めた。このとき、内モンゴル東部の東モンゴル人民自治政府はすでに取り消され、同政府が創設・指導していたモンゴル騎兵5個師団も内モンゴル自治運動連合会の指揮下に入れられ、内モンゴル人民自衛軍と改称された[33]。

李守信が鄭家屯へ移動すると、前述の内モンゴル人民自衛軍騎兵第2師団の2個連隊の兵士約2,000名がそこへ合流した。李守信は彼らを鄭家屯に配置した。某日の夜、陳明仁の鄭家屯駐屯の一個師団がこのモンゴル騎兵2個連隊を突然襲撃したが、殲滅できなかった。しかし、陳明仁部隊はこれで止めようとしたわけではない。モンゴル騎兵が装蹄や買い物のため市内に入るたびに、因縁をつけて困らせ、圧迫していたことを中国の官製の記録は記している[34]。まさに大漢民族主義の表れである。

写真 12　李貴民の家

国民党軍閥陳明仁に抑圧され、活動が大きく牽制されるなか、1946年10月、李守信は鄭家屯での部隊拡大計画をあきらめ、阜新に戻ることにした。阜新に戻る途中、瀋陽まで進んだとき、共産党軍隊が開魯にせまったため、東北行営が李守信に支援命令を出した。当時、開魯に駐屯していたのは国民党陳明仁の部隊である。李守信はすぐに大軍を率いてジリム盟に向かった[35]。かれの昔の上司崔興武および旧部下劉継広の部隊

写真 13　大廟商店。北側は李守民の故地で、道路の西側約 150 メートルのところに李貴民の家がある。

[32] 前掲注12文献、第42頁。

[33] ナランゲレル「中共による内モンゴル騎兵部隊の解散までの軌跡」、『日本とモンゴル』第49巻第1号、第88頁。

[34] 前掲注13文献、第125頁。

[35] 通遼市軍事志編纂委員会『通遼市軍事志』、軍事科学出版社、2007年、第309頁；前掲注12文献、第68頁。

が阜新福興地、フレー・ホショー（庫倫旗）のフレーゴー（庫倫溝）で中共解放軍と一戦を交えた。解放軍は撤退し、李守信部隊が開魯へ進軍した。11月、李守信軍はフレー、ナイマンと要衝開魯を奪還し、「人民自衛軍」総司令部は開魯に移った[36]。

1. 2. 6. 開魯での敗北

李守信軍が開魯入りしたとき、ここにはすでに二つの部隊が勢力を張っていた。ひとつは陳明仁所属の陳天喜師団であり、もうひとつは熱河省主席劉多荃派遣の専員が設置した専署であり、当専員が保安司令を兼任していた。開魯に入ったあと、張念祖はたちまち劉多荃の専員側についたが、李守信軍の実力は依然として強大なものであった。かくして、開魯には3つの勢力が並存するようになった。

当時の李守信軍は主として次の兵力から構成されていた。すなわち鄭家屯滞在の際に合流した2個連隊中の1つ約900人、ダーリジャブの故郷魯北県から来た約800人、アルホルチン旗のラマ僧タルバと弟のエルデンゲが率いる600人、モンゴル騎兵第4師団のその他の反乱軍、などである。開魯は軍事上の要衝であるゆえ、陳明仁もこの時期開魯にやってきて、タルバを李守信軍から離反させ、味方にした。これは明らかに李守信を牽制するためである[37]。

12月下旬、中共解放軍は開魯へ大量の兵力を送った。李守信の元師団長宋万里は開魯に駐留していたが、解放軍が攻めてくると、戦わずに逃走した。宋万里が逃げたあと、タルバと張念祖の部隊は開魯の南で解放軍と戦闘した。解放軍はやぶれ、攻撃を一時中止した。この戦闘のあと、タルバと張念祖も部隊をふたたび李守信の指揮下に入れた[38]。

1947年初頭、アスガン将軍が内モンゴル人民自衛軍騎兵第2師団の兵士1,700余名を統率して、開魯にせまった[39]。アスガン部隊はロブダン部隊を撃退して、李守信と陳天喜師団の部隊にも激しい攻撃を浴びせた。2月25日の夜、アスガンの騎兵は再度攻撃を開始し、10数時間の激戦の末、26日、開魯を占領した。李守信は開魯を脱出する[40]。今回の戦いにおいても、双方の主力はモンゴル騎兵であった。開魯は李守信がわかいときにモンゴル軍を率いて活動をはじめたところでもあった。

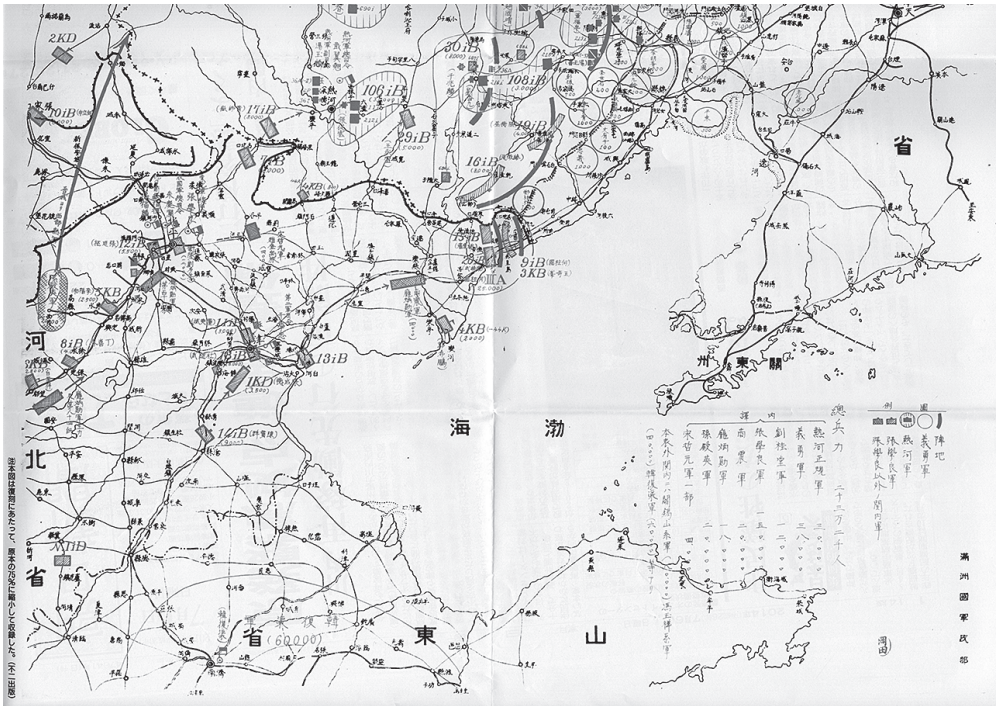
このように、1946年4月以降、李守信は東部内モンゴルで勢力を迅速に伸ばし、多くのモンゴル騎兵部隊を集結し、長期間にわたって中共との戦争を繰り広げて、共産党の機関

---

[36] 前掲注12文献、第67-68頁；前掲注13文献、第126-127頁。
[37] 前掲注13文献、第128頁。
[38] 『偽蒙古軍史料』、第130頁。
[39] 烏嫩斉主編『中国人民解放戦争時期内蒙古騎兵史』、遼寧民族出版社、1997年、第152-163頁。
[40] 前掲注12文献、第67-68頁；張万有、韓玉臣「開魯的戦略転移和再次収復」『哲里木史志』、1986年第3期、第38-39頁。

を赤峰から撤退させ、中共に大きなダメージを与えた。しかし、国民党軍閥の大漢民族主義による圧迫と国民党の統一指導の欠如などが原因となり、失敗に終わった。

写真 14-1（上）、14-2（下）大同２年１月の時点では、林西一帯はまだ熱河軍の支配下にあった。



2. 1947年3月～ 1949年7月：瀋陽、北平、南京、台湾

開魯敗戦後、部隊が改編・縮小され、李守信は北平に戻ったが、ここの情勢も緊迫し、上海、台湾へ逃れる。しかし、徳王の要請を受け、アラシャンに向かうことになる。

2. 1. 人民自衛軍の改編・縮小と瀋陽から北平へ

李守信は開魯脱出後、約300人の部隊と合流してスルク（彰武県）へ向かい、1947年3月1日に同地へ到着した。翌日、東北行営の指示を受け、瀋陽へ赴く。4日、瀋陽に到着し、翌5日、東北行営主任熊式輝と会見した。その後、瀋陽で休養し、「人民自衛軍」は臨時に、参謀長劉継広が指揮した[41]。

1947年5月、東北行営は騎兵3個軍団を創設した。第1軍長に包善一[42]が、第2軍長に王玉崑が、第3軍長に李守信が任命された。熊式輝は李守信に「人民自衛軍」を騎兵第3軍に迅速に改編するよう求めた。

8月末、騎兵第3軍がさらに新騎1旅に改編された。李守信は行営中将軍事参議に任命され、ひきつづき瀋陽に滞在した。のちに、新騎1旅の旅団長に李守信の推薦で烏古廷が就任するが、まもなく、関邦傑に変わる。

北平を離れ、東北と内モンゴル東部で部隊を創設して以来、李守信とその部隊は国民党軍閥の差別と圧迫を受け、戦闘の任務を次からつぎへと絶えずに押し付けられたが、武器弾薬などの給養は常に少なかった。李守信は国民党に不満を抱くようになった。だが、彼にはもはや局面を打開しうる力はなかった。瀋陽に数ヶ月滞在したあと、東北行営の許可を得て、10月29日に北平に戻った。翌日、国民党憲兵団の小隊長が李守信と家族の安全を理由に尋ねてきた。実は監視だと李守信も分かっていた[43]。

1948年7月、傅作義が北平華北「剿総」で会議を開き、宝貴廷が参加した。会議後、宝貴廷が徳王と李守信をたずねて行った。

2. 2. 北平から南京、台湾へ

1948年末、宝貴廷は張家口で休養し、その部隊は宝昌に駐屯していた。このとき、李守信

---

[41] 前掲注13文献、第133頁。

[42] 包善一は1931年、バボージャブの息子ガンジョルジャブとジンジョルジャブがモンゴル独立軍を組織する際、その第1軍司令官に就任した。東北行営がこの騎兵3個軍団を創設する前に、包善一部隊はすでに国民党騎兵第三十一師団に改編されていた（前掲注12の文献、第45頁）。1945年以後の包善一部隊の東北地域における反共産党活動に関しては『民族問題文献彙編』第1072-1074頁、第1086頁等を参照されたい。

[43] 前掲注13文献、第135-138頁。

の東北で創設した新騎1旅もスヘバートル[44]に率いられ、宝昌に着いた。新騎1旅と同時に宝昌の付近に集結したモンゴル騎兵にはナイマン旗とバーリン左旗の保安隊もふくまれていた。このように、1945年8月以来、分断されつづけたモンゴル軍、即ち李守信の内モンゴル東部で組織した部隊と宝貴廷の率いる西部で活動し続けた部隊が合流できたのである。

李守信が北平にいるあいだに、国民党特務がまたも熱河省の山地で新部隊を組織するようにさそったが、効果はなかった。そうしているうちに、北平の情勢も緊迫してきた。1948年10月29日、李守信は家族を伴って上海に向った。上海においても、国民党特務機関「軍統」の監視から逃れることができなかった。今回も「軍統」の少将が李守信の人身安全保護の名目でたずねてきた。家族をおちつかせたあと、李守信はやむを得ず南京に行った。1949年1月1日、徳王も南京にやってきた[45]。ここで、蒋介石が徳王、李守信と会見した。徳王は南京滞在のあいだ定遠営（現アラシャン盟バヤンホト市）でモンゴル自治運動を展開する計画をいっそう明確にした[46]。

1949年1月25日、徳王は南京を発ち、蘭州に2ヶ月滞在したあと、4月、定遠営に到着した。李守信は南京で徳王を見送ってから上海に戻った。まもなく、上海も共産党解放軍の接近で情勢が緊迫したゆえ、4月、李守信は家族とともに台北へ飛ぶ。5月から6月にかけて、「モンゴル自治政府」創設の請願で広州に来ていた徳王が李守信へ広州に来るようにという内容の電報を送った。6月28日、徳王はまたデグライ（徳古来、ジャラガラン）を台北に派遣し、李守信らに広州に向かうよう求めた。李守信とデグライが広州に戻り、7月28日、徳王と李守信ら一行は広州を離れ、定遠営へ向かった[47]。

---

[44] スヘバートルはダルハン王の甥で、包三爺、高山とも称するという。日本撤退後、ダルハン（科爾沁左翼中）旗保安隊を組織し、隊長に就任した。共産党の働きかけによって、保安隊は共産党公安大隊に改編され、スヘバートルは第2中隊長に降任された。1946年7月下旬、かれは反旗を翻す。その後、関邦傑の次に騎兵第1旅団（新騎1旅）の旅団長に就任した。1948年10月、遼瀋戦役に参加し、敗北したが、包囲網を突破し脱出した。烏古廷の指示を受け、11月14日、モンゴル騎兵1千余人を率いて内モンゴルの西部へ進軍し、宝貴廷部隊と合流し、新編モンゴル軍（徳王のモンゴル軍）第1師団長に任命され、徳王の定遠営「モンゴル自治政府」の軍事的支柱となった。1950年1月末頃、李守信らとともにモンゴル人民共和国に入るが、逮捕され、中国へ強制送還された。スヘバートルは1950年の自供のなかで、1945-1948年の間、共産党の解放軍、公安隊と9回にわたる大きな戦闘を繰り広げた事実を供述した、と中国の官製の資料は伝えている。スヘバートルは送還されてまもなく共産党に処刑された（前掲注12文献第38-39頁）。スヘバートルと共産党解放軍との戦闘については、通遼市軍事志編纂委員会『通遼市軍事志』、軍事科学出版社、2007年、第309頁、第317-322頁；内蒙古自治区志・軍事志編纂委員会『内蒙古自治区志・軍事志』、内蒙古人民出版社、2002年、第592-604頁を参照。なお、包三爺、高山との名についてはさらなる検証が必要であり、関連の記述は正珠爾扎布「内蒙自治軍始末」（『偽満興安史料』（内蒙古文史資料第34輯）、1989年）に少し見られる。

[45] ドムチョクドンロプ著　森久男訳『徳王自伝』、岩波書店、1995年、第340頁；『偽蒙古軍史料』第160-162頁。

[46] 徳王自述、第152-155頁。

[47] 同、第162-163頁。

3. 1949年在アラシャン：徳王の忠実な追随者

8月、モンゴル自治政府がアラシャンで成立した。ほどなく、西北へ移動し、国境付近にとどまる。爾後、李守信らは徳王をおってモンゴル人民共和国に入る。

3. 1. 在寧夏：軍閥馬敦静の地に身を寄せる

1948年12月から1949年1月にかけて、董其武が命令を下し、新騎1旅[48]と宝貴廷の第3総隊を全部宝貴廷に統率させた。部隊は厚和の付近に駐屯していた。

徳王に追随するため、1949年5月、宝貴廷が部隊を率いて固陽へ移り、オラト中旗を経て、7月、寧夏に到着した。部隊の給養が非常に困難になり、宝貴廷、李守信が寧夏軍閥馬鴻逵と交渉した結果、新騎1旅は寧夏に収容・改編され、しばらくのあいだ、馬敦静（馬鴻逵の次男）の指揮下に入り、居候の日々を送ることとなった。ところが、馬敦静はモンゴル軍を黄河以東の陶楽県に駐屯させ、黄河以西のアラシャン地域への進入を許可しなかった[49]。

8月10日、徳王と李守信の組織したモンゴル自治政府が定遠営で成立し、李守信は保安委員会副委員長に選ばれた。宝貴廷は部隊のなかから、内モンゴル東部とシリーンゴル、チャハル各ホショーの代表ロブダン、オルトら30余名を派遣し、成立大会に出席させた。

この期間中にも、李守信、烏古廷は宝貴廷の部隊新騎1旅の定遠営進入・駐留について馬敦静と交渉を繰り返したが、依然として許されなかった。さらに、8月下旬に、馬敦静は蘭州西北軍政長官馬歩芳の名義で李守信を陝甘寧辺区騎兵総司令に任命し、新騎1旅とともに寧夏兵団の指揮下に入れると公表した。李守信が断固として拒否したにもかかわらず、馬敦静はこれが馬歩芳の命令だと李守信に圧力をかけた。李守信は綏遠に行く意向を示したが、今回もやはり傅作義の断固たる反対で行けなかった[50]。国民党軍閥傅作義の大漢民族主義、少数民族に対する差別と侮蔑については、彼とラティモアの会話からもその一端が窺われる。ラティモアがモンゴル自治問題について慎重に触れたとたん、傅作義は「モンゴル人の中には貴方や私のような文明人は一人もおらん。あいつらは人間ではない。牲口（家畜）なのだ。もしよく働けば餌をやる、もし従順でなければ打ってやるだけだ」とイキリ立って怒鳴りだした[51]。

---

[48] このとき、アンエンダー（安恩達）は新騎1旅の旅団長を、スヘバートル、孫明海が副旅団長を担任していた（前掲注13文献、第164-166頁）。

[49] 徳王自述、第170頁；卢明輝『中華民国史資料叢稿　蒙古自治運動始末』、中華書局、1980年、第380頁。

[50] 前掲注13文献、第181頁。

[51] Owen Lattimore, Compiled by Fujiko Isono, *CHINA MEMOIRS, Chiang Kai-shek and the war Against Japan*, University of Tokyo Press,1990, pp.30-31；磯野富士子編·訳『ラティモア：中国と私』、みすず書房、1992年、第33-34頁。

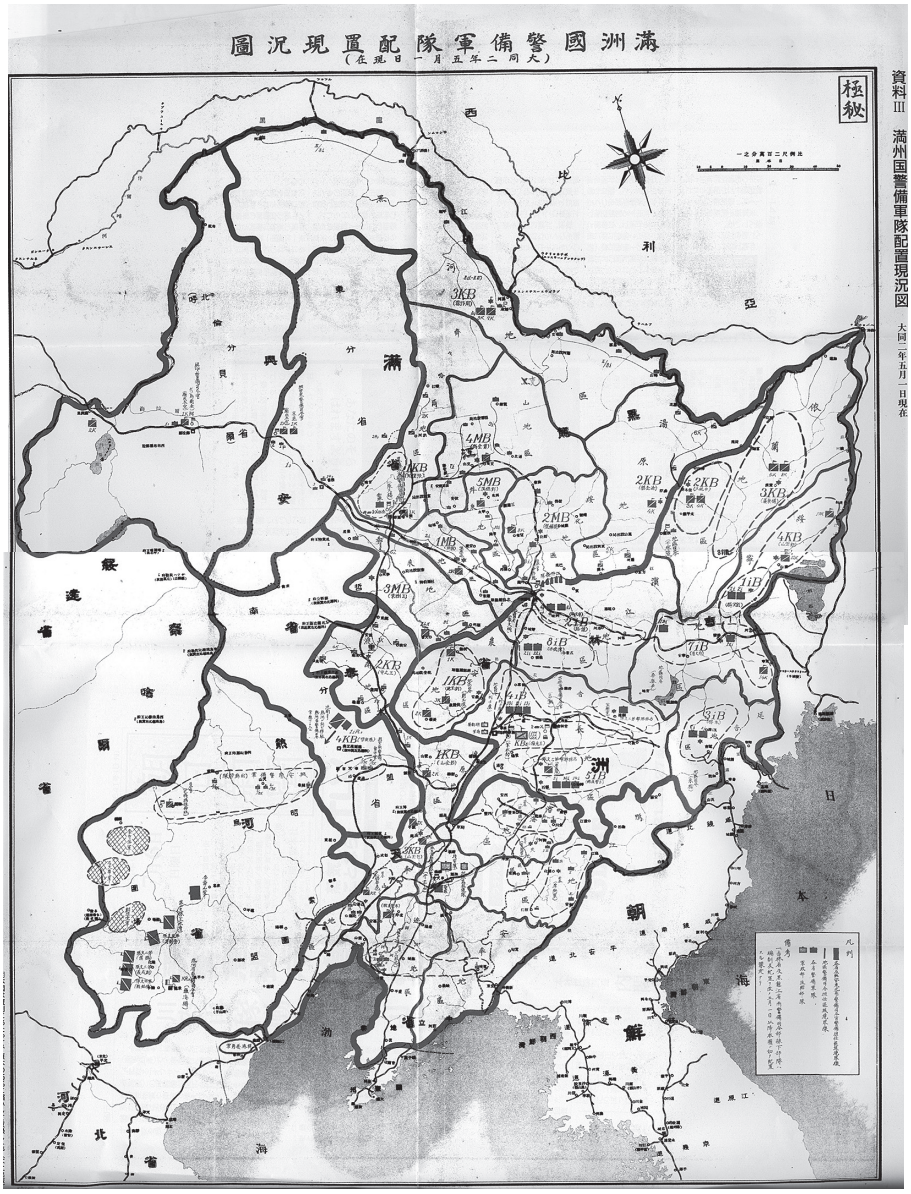


写真 15　大同二年五月に李守信軍は日本軍政部直轄部隊となっていた。

解放軍が西北を攻め、寧夏が陥落寸前となり、呉鶴齢、札奇斯欽、デグライ、烏古廷、烏臻瑞らは相次いで台湾に逃れた。このとき、馬敦静は李守信部隊に三辺（陝北の定辺、安辺、靖辺）でゲリラ戦を展開し、共産党解放軍に抵抗を続けるよう指示した。李守信が部隊を率いて三辺へ出発して間もなく、陶楽県に戻るとの馬敦静の命令が届いた。陶楽県帰還の途中にも、李守信に収容を求めてきた部隊が幾つか現れたが、李守信に断られた[52]。

[52] 前掲注13文献、第181-182頁。

3. 2. 逮捕：ゴルナイ・ゴルからモンゴル人民共和国へ

9月中下旬、綏遠、寧夏が前後して共産党に占領され、李守信部隊は黄河東岸に沿って北上してから、黄河を西へ渡って磴口に着いた。磴口から定遠営へすすみ、定遠営から約100km離れたところでロブダンと会い、徳王が9月20日に定遠営を発ち[53]、アラシャン北部のトゥクメィン・スメ（Tüküm-ün süme）を目指して行ったことを知り、李守信部隊もトゥクメィン・スメへ進む。徳王は李守信部隊についての情報を得るとすぐに、「モンゴル軍総司令部」を設立し、李守信を副総司令に、宝貴廷を総参謀長に任命した。総司令部に2個師団が所属し、第1師団長にスヘバートル、副師団長に孫明海、第2師団長にジランタイ（吉利占太）、副師団長にタルバがそれぞれ任命された。部隊は1千余人であった[54]。

10月初旬、李守信はトゥクメィン・スメに到着した。そのとき、徳王はすでにトゥクメィン・スメから出発して、モンゴル人民共和国境内のハラ・エルギ（Qara ergi）[55]でモンゴル人民共和国内務省（実は内防処）次長バヤルに会いに行った。徳王がトゥクメィン・スメに戻った後、部隊の給養に困り、アラシャン旗保安隊長派遣の代表ドゥアン・タラダンダイ（Duan Taldangdai）らと協議した結果、徳王と李守信らは西北へ移動し、エジェネ旗領内のゴルナイ・ゴル（Gorunayi gool拐子湖）へすすむこととなった。11月末、バローンシャルジャーイン・スメ（Baragun sharja-yin süme ）に着き、その後ゴルナイ・ゴルに到着した。

12月29日、徳王はモンゴル国境地帯のチャガントルガイ（Chagan tolugayi）へ行き、バヤルと二回目の会見をすることになった。出発の前に、ゴルナイ・ゴルのすべてを李守信に任せ、21日間を期限に、徳王は必ず戻ってくると約束した。出発に際して、モンゴル自治政府の軍隊と政府首脳の全員が見送りに来て、李守信は徳王に「あなたはモンゴル人民共和国へ行ってうまく連絡を取ってください。私も行くつもりです。ぶざまな目にあうくらいなら、モンゴル地方で同じ目にあいます。けっして八路軍の手にかかったりしません。」と言った。

1ケ月余りが経過して、ようやくモンゴル人民共和国から徳王の手紙が李守信らに届けられ、会議を開くから、李守信、スヘバートルら6人に対してチャガントルガイに来るようにという指示があった[56]。李守信一行がチャガントルガイに向かう途中、徳王の電報が届き、ウランバートルに行くように改めて指示された[57]。ウランバートルに着いた李守信ら

---

[53] 阿拉善盟政協文史資料研究委員会編『徳王在阿拉善』、第171頁；徳王自述では旧暦の8月2日となっている（徳王自述第173頁）。

[54] 徳王自述第173-174頁；一説では、このときのモンゴル軍は2千余人に達したという。詳細は内蒙古自治区公安庁辺防局編『内蒙古公安辺防史料1950-1985』第214―215頁を参照。

[55] もともと、徳王とモンゴル人民共和国側との会見はウランチャブ・チョールガンのバヤンシャンド（Bayanshangdu）で行う予定だった（Surtaltu orčiγulba, *Demčigdongrub-un toγačilta*, Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriya, 1990, pp. 414-415.；徳王自述第192頁）。

[56] 徳王自述第188-200頁。

は逮捕され、1950年に中国へ送還された。

台湾から内モンゴルに帰り、そこからモンゴル人民共和国に赴くまでの数ヶ月のあいだ、李守信には、ふたたび台湾へ戻る機会が何度もあったが、もっとも重要で艱難なときに、徳王から離れることなく、最後まで徳王と行動を共にした。

4. 特赦後の李守信の生活

強制送還後の李守信の審判と断罪、そして獄中をいかに過ごしたか等々については、まったくわかっていない。知るすべもない。今、我々が分かっているのはただ1964年12月28日に、中華人民共和国最高裁判所が発した特赦令だけであり、そこには李守信が「改造を経て、確実に悪を改め、善に遷った」ため、釈放する（写真3）と記されている。ときは、1950年の強制送還からすでに15年間も近い歳月が経っていた。内モンゴル自治区公安庁が1964年7月31日に作成した「戦争罪犯処理報告表」の記載によると、釈放前の李守信は内モンゴル自治区公安庁留置場に拘禁されていた。表にはまた李守信の軍人階級を大将（上将）と記している（写真5）。

釈放された李守信には徳王と同様、フフホト市に位置する内モンゴル文史研究館員の職が与えられた。1945年8月の北平到着から1949年8月に寧夏で転々するまで、李守信は厚和帰還を切実に望んだにもかかわらず、終始傅作義の妨害によってとうてい実現できなかった。もし、上記の「戦争罪犯処理報告表」に記されているように、フフホトに収監されていたとすれば、モンゴル人民共和国から中国に送還され、15年にわたる獄中の歳月と釈放後の生活は、彼の宿願の一部を実現させ、厚和帰還はできたものの、当時と昔では、くらべものにならない。文史館は李守信に秘書劉映元をおき、回想録の作成に取りかからせた。2015年、筆者は劉映元も数年前に亡くなったと知り、ほかの李守信関係者を探した結果、2015年8月21日、李さん（文史研究館員、男性、57歳）にインタビューすることができた。父親が文史研究館員で、目が見えなくなったため、李さんが付き添って勤め先によく行ったので、いつも李守信を見かけていた。当時、まだ幼かったが、李守信については多少の記憶が残っているという。次は李さんの語りである。

> 李守信は明るくて優しく、しかも能弁な人です。身長が約180センチ、体格はがっしりしているけれども、足腰の痛みでいつも両手に杖をつき、上半身は前かがみになり、ほぼ直角になるんです。背筋をまっすぐに伸ばした姿を見たことがない。家にいると

[57]『偽蒙古軍史料』第187頁；徳王は自伝のなかで、モンゴル側は李守信一行がウランバートルに着いたことを伝達してくれなかった、徳王と李守信らがウランバートルで初めてあったのは尋問のときで、徳王の「犯罪事実」の証言のためだった、と述べている（徳王自述第207頁）。

きは、いつもオンドルに腰をかけ、杖は手元に置きます。李守信は一人暮らしで、わたしたちから見れば、経済的に裕福で、いつも私ら子供たちに飴やお菓子をくれていたので、彼の家に行くのが子供たちの楽しみでした。そのため、当時の李守信についての記憶は未だに鮮明に残っています。

李守信の住居は庭付きの平屋です。左手が書斎で、真ん中が応接間です。右手の部屋のオンドルにいつも卓子を置いてあります。冬は七輪で家を暖める。とても人目を引くのは腕時計とパーカー万年筆でした。新城の一満州人が水汲みやごみ出しなどを手伝っていました。李守信は給料はあまり使わず、手当たり次第に敷布団の下に入れていました。

李守信は獄中生活についてほとんど何も語りません。ウサギにえさをやるのが獄中の唯一の仕事だったと言います。文革中、人々がみんなこの特殊な人物から遠ざかっていたのもよく覚えています。文革が終わったあとの、人々の話によると、李守信は実に聡明で、判断力に優れ、機転がきく人で、固執することはありません。

文革中、人々は彼を遠ざけるようなことはしても、あえて彼を冒す人はさすがにいません。ある日、東北から男女2人の幹部が「外調」で李守信を尋ねてきた。いわゆる「外調」は文革の時期の特有な調査方法で、被調査者の歴史を調べるために、他所つまり「外地」まで行って関係者に聞き取りして調査を行うのです。その女性幹部が傲慢な口調で李守信に「正直にいえ」と注意した瞬間、李守信が杖を手に取って女性幹部に振り下ろすところを同行の男性幹部に止められ、2人が謝って、この件が収まった、とよく耳にしていました。

また、李守信がいつも自慢話のように話していたことがあります。彼の住む江南館巷から文史館までは遠くないが、足腰の痛みで途中いつも「街心花園」という公園のベンチで休憩する。ある日、2人の泥棒が彼のあの高級な腕時計を奪おうとしたら、李守信が杖でその2人を撃退して追い払った。「虎が平野に落ちても、ここまで虐められることはないだろう。やつらは俺のことを知らないのか」。

当時の大人たちの噂では、彼の死去は疑わしいところがある。息を引き取ったのに最初に気づいたのがあの手伝いさんで、文史館事務室の職員が現場に着いたときには、腕時計とパーカー万年筆は見当たらなかった。敷布団のしたのお金も減っていたようです。

筆者は李さんに日本敗戦後の李守信の選択について訊ねてみた。李守信は当時、共産党と傅作義との違いが分からなかったと、李さんは答えた[58]。

[58]『李守信自述』第340頁等の内容と対照すると、確かにそうだったのであろう。

5. 遺骨の安置：李守信後裔へのインタビュー

李守信は1970年5月にこの世を去った。では、彼の遺骨がどこに安置されたのか。故郷には彼の親族がまだ健在なのだろうか。

このような問題に答えるため、2015年8月29-30日、筆者は遼寧省北票市馬友営蒙古族郷大廟村（写真6, 7）の村民李貴民にインタビューした。李貴民は李守信の従兄の孫である。李貴民の家は外見上、ほかの民家と何ら違いがない。しかし、家の中に李守信と徳王の写真を棚の一番上に飾ってあることが彼の特殊な家柄を表していた（写真8）。

李貴民は1954年5月、大廟村に生まれた。大廟村は李守信の故郷で、元は内モンゴル・ジョソト盟トゥメト右旗のゴルゴラタイ（Γurγuultai、雉の生息する処との意味）大廟村である。いまはゴルゴラタイという名はすっかり忘れられ、ただ大廟村と称されている。村はモーズ山脈に囲まれ、草木が青々と茂った美しいところである。

李貴民は李守信を「老爺」と呼ぶ。つまり「一番年下のお爺さん」の意味である。以下は李貴民の証言である。

> 私の祖父李君は家の長男で、次男は李臣と言い、李守信は三男です。祖父李君には3人の息子李景陽、李景堂、李景栄がいた。次男の李景堂は日本留学の経験を持ち、徹底的な反共主義者ですから、土地改革のとき、共産党に銃殺された[59]。父李景栄から私たち4人の息子が生まれ、長男は大連に、次男は43歳の若さで病死し、私は三男で、弟は瀋陽にいます。
>
> 李守信の息子李景凡、李景芳、李景元の三人はみな台湾に在住しています。高齢ですが、いまだ健在です。大陸と台湾の関係が緊張・対立を経て緩和してから、台湾側から連絡が来た。老爺が亡くなったあと、王治平が遺骨を北京に迎え（唐成良もすでに亡くなっていた）、1971年の清明節に北京の従兄が老爺の遺骨を大廟村に届け、ここに埋葬した。こうして、李守信はようやく故郷に戻ってきました。里帰りできてよかっ

[59] 李景堂については、中国の官製の資料に更なる詳細な記載が残されている。1949年3月17日、アルホルチン旗ハンスメ・ノトクの牧民ラシーが牛糞を集めていたところ、馬に乗ったひとりの旅人に出会い、相手はここがどこかと尋ねた。ラシーは旅人を家まで案内したあと、村の共産党公安員に通報した。旅人の名はイサーブ（義薩布）、漢語名は李景堂で、ホトリンガの参謀長ということを聞きだして、イサーブが所持していた銃2挺と鞍付けの馬2匹を取り上げて逮捕した。イサーブは李守信の甥で、満州国騎兵連隊の副参謀長、師団参謀長を担当し、日本撤退後、国民党騎兵総隊の少佐となった。遼瀋戦役後、ホトリンガの軍隊に入り、参謀長に就任した（内蒙古自治区公安庁アルヒーフ49－弁公－永久－15。前掲注12文献の第134-135頁より）。したがって、イサーブ（李景堂）は、このときの逮捕後に処刑されたと推測できる。ただ、逮捕されたあとのイサーブに関する情報は当該アルヒーフではまったく触れられていない。

た。2000年10月5日、李守信の息子李景凡と李景元が台湾から大廟村を訪れ、父親の霊を祭り、墓碑を立てました（写真9, 10―筆者）。彼らは2000年当時、70歳を超えていたので、今は90歳の高齢です。

李貴民夫婦の案内で李守信の墓地を訪ねた。墓は大廟村の西約400メートルの小高い山の頂に立ち、村を見守っている。墓の横に立って眺めると、村の向こう側にモーズ山が目に映る。墓地には石碑が1つ、盛り土の墓が4つある。旧暦7月15日に墓参りしたばかりなので、墓の頂上にあたらしい紙銭が置かれたままにある。石碑は李景凡と李景元が2000年に建てたもので、「永世懐念　李氏宗親之靈墓」（左側に「公元二千年」と、右側に「北票市馬友営郷大廟村」と刻まれている）の碑銘も李景凡の筆跡である、と李貴民は説明してくれた。墓碑の横で盛り土に向かって立つと、左の手前は李守信の、後ろは李貴民の父母の、右の手前は李貴民の祖父母の、後ろは李貴民の伯父の墓である（写真11）。

李貴民の家は北票市から小塔子行きの道路の西、やく150メートル離れたところにある（写真12）。道路のすぐ東は李守信の故居の場所で、今は大廟村商店の北側になる（写真13）。李貴民の語りによると、村名の大廟村はここの大きなお寺に由来するもので、寺の名はゴルゴラタイ・スメと言った。寺院は破壊され、いまや形跡もないが、位置が道路の西にあって、李守信の故居にとても近く、今の李貴民の家とのあいだは100メートルくらいの距離である。すなわち、寺は李守信の故居と李貴民の家のあいだにあったわけである。

名前に「営」が付く村は過去のモンゴル人の集落で、「溝」が付く村は純漢人の村落であった。現在、名義上はモンゴル人の集落であっても、漢人がたくさん入ってきて、モンゴル人が同化され、もはやモンゴル語が話せなくなった。李貴民の村は約100世帯、人口約500人で、戸籍上モンゴル人が半分を占めるが、モンゴル語ができる人は80歳以上の数人の年寄りのみである、と教えてくれた。

インタビューのなかで、李貴民がもっとも多く語ったのは文革中の辛酸苦難である。李守信の後裔であるという出身がわざわいをもたらした。ここでは、その一部だけを記しておく。

父親李景栄は1914年の生まれです。妻が一女を産んだあと死去した。父は1947年に2人目の妻、私の生母を娶った。母が李家に嫁いでまもない頃、情勢が急変した。北票に土地改革「土改」が始まった。李家は村の屈指のかねもちですし、それに、李守信が共産党と敵対関係の国民党側に付いたので、「土改」の第一の対象となった。父の一家を含む李家全員は北京に逃げ、李守信をたよって行った。ところが、まだ落ち付かないうちに、北京も混乱に陥った。

解放後、私たちは北京から故郷に送還された。戻ってくるときは祖母、両親と姉の家族4人だったが、母は兄を身ごもっていた。故郷に戻ったが、住むところはない。土地も家もすべての家産はとっくに没収され、貧農と貧下中農などの無産階級に分け与えられた。私たちは正真正銘の赤貧となってしまった。一家は親戚の家を転々とするとても辛い日々を続けた。人々は私たちを避けて遠ざかるばかりで、出身の悪い地主一家を快く受け入れてくれる者がだれ一人いない。いつも引越していたのが、いまも記憶にくっきりと刻まれている。兄が生まれたとき、私たち一家は親戚の小屋に身を寄せていた、と母が言う。

父は大麻を吸引するため、体が弱く、1963年に亡くなった。私が9歳のときだった。弟はまだ幼く、上の3人の兄弟は生産隊の羊を放牧した。大地主で反動派の出身で、夫に死なれ、子供たちはまだ幼く、住む家もなく、人の小屋に身を寄せ、転々とした。このような母の辛酸苦難は想像できる。昼は全員が生産隊の畑で働き、羊を放牧する。夜は「学習」に呼ばれる。名義は「学習」ですが、実際は批判闘争つまり「批闘」です。地主の家族も搾取階級なので、老若男女の区別がなく、全員が「批闘」されるのは当然です。蹴るなり殴るなりはごく普通のことで、黙々と我慢するしかない。肉体的に苦

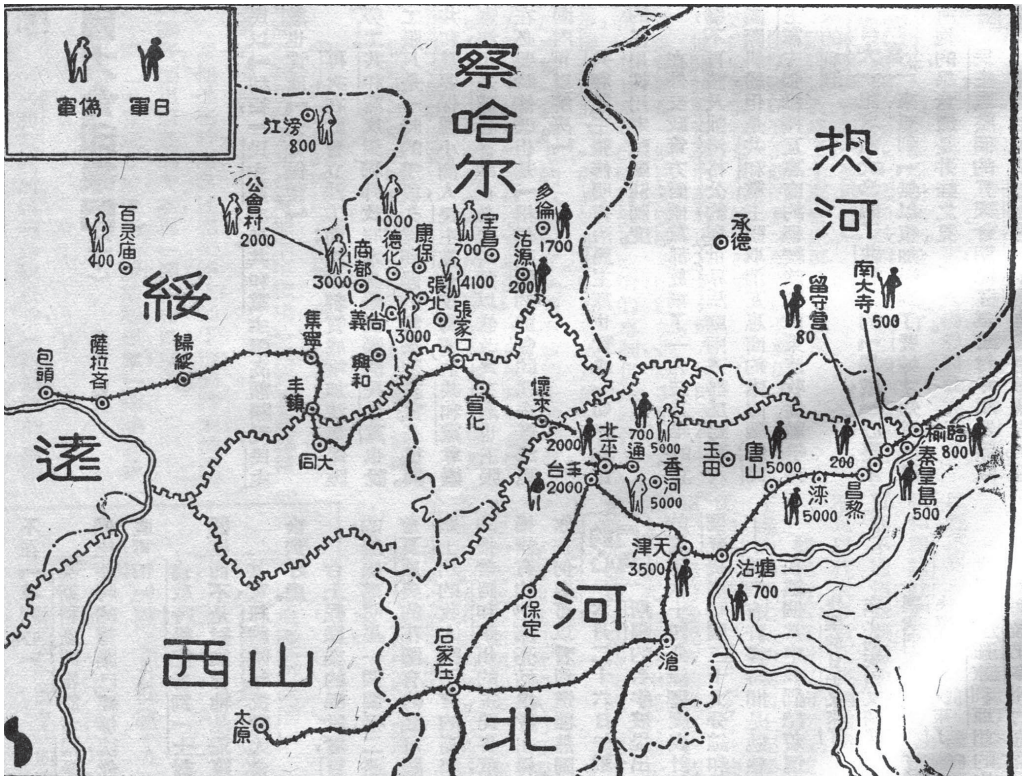


写真 16　察北駐軍図（韜奮主編『生活星期刊』第 1 巻第 22 号、民国 25 年 11 月 1 日より）

しめられるよりもっと辛いのは精神的な圧力です。長期にわたるゆえない指弾、いじめ、虐待を受け、排斥される孤独と寂しさとコンプレックスに包まれた少年時代だった。小学2年生のときに学校を中退させられた。いったい、私たちには何の過ちがあるというのか。私たちは何の悪い事もしていない。

取材のなか、李貴民が何回も「知識がないことは一番駄目だ。無知はわが人生のなかでいちばん残念なことだ。勉強が嫌いなわけではなく、権利を奪われたからです」と嘆いた。李貴民は出身のせいで、結婚相手ができぬまま30歳に近づいた。文革の終息後、1978年から2003年まで、村の会計係をつとめ、1982年にようやく結婚できた。当時の農村では珍しい晩婚である。1983年に長男が、1992年に長女が生まれた。

李貴民は明るい性格と誠実で熱心な人柄の持ち主であり、文革が終わると、村の小学校は教師の職を与える意向があったが、2年生で退学した彼にできるはずがなかった。母親は一生無尽の苦難を嘗めて、やっと文革が終わって、生活が転機を迎え始めた時期の1978年に亡くなったことを、李貴民は今も悔しがる。

李貴民は運命に翻弄された人生を機敏に生きた、思考力に富んだ人だと、私は実感した。

おわりに：徳王政権における李守信の役割

李守信の経歴は複雑なため、彼をどう評価するのかは一つの難題である。彼自身も自伝の冒頭で明示したように、李守信は内モンゴル近代史上の「相当典型的な反面人物」である、というのは多くの人の考えであろう。

李守信は徳王政権のナンバーツーとして、日本、国民党、共産党の要員と付き合い、一度叱咤すれば風雲も震えるほどの存在であった。同時に、謎に包まれたような奇談的な人物でもある。劉映元が指摘したように、大小無数の戦いを経験した李守信には傷跡はない。奇跡だといわざるを得ない[60]。

日本の撤退後、李守信は国民党のために奔走したと言われている。ところが、1949年の、台湾から内モンゴルへの帰還は徳王の要請によるものである。共産党解放軍が西北へ進むなかで、徳王にしたがってアラシャンでモンゴル自治政府を再組織した。

実際、1930年代から1949年のモンゴル自治運動までの道のりのなかで、李守信が徳王政権の成立と発展に重要な役割を果たしたことは疑いない。早期の察東特別自治区が証の一つになる。1933年2月21日、熱河事変（熱河作戦）が起こり（写真14-1、2）、3月4日、湯玉麟が承徳を手放し、熱河全境が日本軍に占領された。3月5日、崔興武がバーリンの林西で

[60]『李守信自述』、第353頁。

部隊の統率を李守信にゆだね、李守信は部隊を率いて東北軍を離脱し、関東軍に帰順した。4月初め、李守信部隊は関東軍によって熱河遊撃師[61]と改編された（写真15）。

5月、李守信部隊はドロンノールに駐屯していた劉桂堂軍を追い払い、この地を占領した。8月、李守信は関東軍の支援を受けて、ドロンノールに察東特別自治区を設置し、行政長官に就任し、満州国派遣の日本人顧問を置き、統治を始めた。察東特別自治区は着実に日本側の内モンゴル工作の一拠点となった。9月頃、李守信部隊は察東警備軍に改編され、規模は9千人に急増した[62]。

写真 17　*Temür kerem*（鉄壁）誌創刊号表紙

元来、満州国とチャハル省を占領した国民党軍閥宋哲元の第29軍とのあいだに、トラブルが多発していた。とりわけ察東特別自治区成立後の1934年に入ると、対立がいっそう激しさを増した。このような情勢のもとに、日本軍の指示で、1935年12月、察東警備軍が察北六県に進出し、察東事件（または六郡事件）を起こし、31日、李守信軍が張北に進入した（写真16）。

1936年1月22日、張北に徳王、李守信、ジョドバジャブ（卓世海）を中心としたチャハル盟公署が創設された[63]。1936年2月10日、チャハル盟公署をもとに、蒙古軍総司令部が成立した。さらに、5月12日、蒙古軍政府が設立された。蒙古軍政府の基礎はまさに察東特別自治区であるとの指摘もある[64]。李守信は日本を二度訪問した[65]。重要な場での発言のなかで日本との提携を強調し、日本の援助を受けたモンゴル軍が増強しつつあると明言していた[66]。

察東特別自治区はチャハル盟公署、蒙古軍総司令部および蒙古軍政府の重要な基礎の一つであった。李守信も認めているように、「関東軍の庇護のもとに、3つの組織が見えてき

---

[61] 同前注文献第121-127頁。熱河遊撃師はまた興安遊撃師と呼ばれた（松崎陽「内蒙古軍の成立」『日本とモンゴル』第17巻第2号、第1-3頁）。

[62] 稲葉正夫「関東軍の内蒙工作（一）」、『国防』昭和38年4月号、第62頁；李守信自述第135-136頁。

[63] 島田俊彦、稲葉正夫編『現代史資料（8）日中戦争（1）』、みすず書房、1964年、第492-500頁。

[64] 稲葉正夫「関東軍の内蒙工作（二）」、『国防』昭和38年5月号、第80頁。

[65] 第1回の日本訪問の時間について、『李守信自述』のなかでは1939年の春末だとしており（第299頁）、徳王の自伝では1938年の秋だとしている（第79頁）。第2回訪日時間については、李守信と徳王の回想録もともに1941年2月11日に張家口から出発した、と同一の記述をしている（李守信自述第308頁、徳王自述第107頁）。

[66] Köke tuγ qoriya, *Köke tuγ*, 89 düger quγucaγa, 1943.1.13.

た。つまり、百霊廟の蒙政会、満州の興安軍と察東警備軍である」[67]。徳王政権の維持と発展に李守信が重要な役割をはたし、李守信と徳王の政治活動と政治生命は終始緊密に相伴ったものであった。李守信は徳王政権軍隊の実質上の最高指揮者として、軍隊の強化を模索し、雑誌の発行も試みた[68]（写真17）。

1945年以降、李守信にしたがう将校のなかには、旧部下が少なからずいた。たとえば、劉継広、郭秀珠、元モンゴル軍第3師団長宋鵬九らがその例である。モンゴル軍と国民党軍における李守信の声望を一側面から反映しているとも言える[69]。

李守信の原籍は山東であるが、モンゴルに来て数代も経るうちに、モンゴル化して「随蒙古」になった[70]。1933年以降、とりわけ1949年の李守信の行動は、彼が反共主義者であり、民族主義者であることを表している。一方、「彼の意識が漢族に近かった」という見解もある[71]。資料の欠如などの制約によって、いまの段階では、李守信について全面的に考察し論述するのは難しいだろうが、つぎの二点を考える必要があろう。まず、自伝のなかでどのような心境でガーダー・メイリン蜂起の鎮圧に触れ、どのように述べたかは永遠に謎のままかもしれないが、晩年の彼は、なぜ鎮圧とガーダー・メイリン銃殺の真相を明かしたのだろうか。長期間にわたる軍閥の大漢族主義による抑圧、長年の獄中生活などを経験した後、若い頃の軽率な行動に対する反省と悔悟の現れであろう。つぎに、1949年の夏、徳王の側近を含む大勢の人が台湾に逃亡するなかで、李守信は徳王の傍に留まり、徳王とともに最後まで努力した事実も客観的に見なければならない。その是非功過は一言で総括するのが至難である。だからこそ、最大限に事実に近づき、真実を掘り起こす研究が重要である。

参考文献

モンゴル語と欧文

Bayannamur, *35-duγar qoriya-tai qolbuγdal büküi kömüs bolun kereg yabudal-un tuqai ergičegülül*. Aruqorčin-u suyul teüke（4-düger debter）, 2003.

Čidaltu, *Ülügei nutuγ-un urγuγa bosuγa edür-üd-tu*. Aruqorčin-u suyul teüke（2düger emkitgel）, 2008.

Köke tuγ qoriya , *Köke tuγ*, 89 düger quγučaγa,1943.1.13.

---

[67] 李守信自述第139頁。
[68] 烏古廷「創刊詞」、『鉄壁』創刊号、成紀七三六年十一月二十日発行。
[69] 松井忠雄『内蒙三国志』、原書房、昭和41年、第142-145頁。
[70] 李守信自述第2-3頁。
[71] ドムチョクドンロプ著　森久男訳『徳王自伝』、岩波書店、1995年、第509頁。

Surtaltu orčiγulba, *Demčigdongrub-un toγačilta*, Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriya.1990.

Owen Lattimore, Compiled by Fujiko Isono, *China Memoirs*, *Chiang Kai-shek and the war against Japan*, University of Tokyo Press,1990.

中国語

阿拉善盟政協文史資料研究委員会編『徳王在阿拉善』(阿拉善盟文史第5輯)、1988年。

阿魯科爾沁旗志編纂委員会編『阿魯科爾沁旗志』、内蒙古人民出版社、1994年。

赤峰軍事志編纂小組編『赤峰軍事志』、内蒙古人民出版社、1992年。

赤峰市政協文史資料委員会『和子章与蒙騎四師』、1989年。

都瓦薩執筆「内蒙古自衛軍騎兵第四師三十七団」『扎魯特史話』、内蒙古人民出版社、1989年。

克什克騰旗軍事志編纂委員会編『克什克騰旗軍事志　公元前300年―公元2005年』、2008年。

奈曼旗政協文史資料工作委員会『奈曼旗文史資料』第1輯、出版年不詳。

娜仁格日勒　「還原歴史：1945年以後的李守信」『アジア研究』第11号、静岡大学アジア研究センター、2016年3月。

内蒙古公安庁公安史研究室『解放戦争時期内蒙古東部地区公安工作大事記述』(繁体第一稿、征求意見稿)、1986年。

内蒙古自治区公安庁辺防局編『内蒙古公安辺防史料1950-1985』、1989年。

内蒙古自治区政協文史資料研究委員会編『徳穆楚克棟魯普自述』(内蒙古文史資料第13輯)、1984年。

内蒙古自治区政協文史資料研究委員会編『李守信自述』(内蒙古文史資料第20輯)、1985年。

内蒙古自治区政協文史資料委員会編『偽蒙古軍史料』(内蒙古文史資料第38輯)、1990年。

石国清、席護中編『北票文史資料第二輯』、政協北票市委員会、2003年。

韜奮主編『生活星期刊』第1巻第22号、民国25年11月1日出版。

翁牛特旗軍事志編纂委員会編『翁牛特旗軍事志　公元1295年―公元2005年』、2008年。

烏嫩斉主編『中国人民解放戦争時期内蒙古騎兵史』、遼寧民族出版社、1997年。

札奇斯欽『我所知道的徳王和当時的内蒙古』、中国文史出版社、2005年。

張万有、韓玉臣「開魯的戦略転移和再次収復」『哲里木史志』、1986年第3期(総第10期)、『哲里木史志』編輯部。

中共中央統戦部編『民族問題文献彙編』、中共中央党校出版社、1991年。

日本語

磯野富士子編·訳『ラティモア：中国と私』、みすず書房、1992年。

稲葉正夫「関東軍の内蒙工作(一)」、『国防』昭和38年4月号。

――「関東軍の内蒙工作（二）」、『国防』昭和38年5月号。
島田俊彦、稲葉正夫編『現代史資料（8）日中戦争（1）』、みすず書房、1964年。
ドムチョクドンロプ著　森久男訳『徳王自伝』、岩波書店、1995年。
ナランゲレル「中共による内モンゴル騎兵部隊の解散までの軌跡」、『日本とモンゴル』第49巻第1号、2014年9月。
松井忠雄『内蒙三国志』、原書房、昭和41年。
松崎陽「内蒙古軍の成立」『日本とモンゴル』第17巻第2号、日本モンゴル協会、1983年。
森久男編著『徳王の研究』、創土社、2000年。
楊海英『チベットに舞う日本刀』、文藝春秋、2014年。

（Narangerel　内モンゴル大学）